

鯨城学園と共催で公開講演会を開催しました

鯨城会広報

鯨城学園と鯨城会の共催で、早朝までの雨がやみ小春日和となった、3月19日(木)10時～11時30分に鯨城ホールで公開講演会(チラシは第153回公開講座)を開催しました。

鯨城会が主催した講演会は令和4年度までに39回実施しましたが、令和5年度からは学園との共催と変更になりました。よって本年度の開催で鯨城会としては42回目となります。

入場者は、例年通り入場整理券を鯨城会幹事と学園職員と1階で配布しました。

スタッフが集まって準備している9時前から開場を待ちわびる方々も見え、前評判はいいのかと期待しました。

しかし、入場整理券の配布枚数は594枚でした。2年前には「懐かしの歌の贈り物」と題し開催したところ、来場者が定員オーバーとなり、入場をお断りする事態となりご迷惑を掛けました。昨年は「星野道夫とアラスカ」では620人程度の来場者でしたので、昨年からは少し減少です。やはり高齢者にとっては、来場者も楽しめる企画でないと思われる気持ちが湧かないのかもしれませんが、今後の課題と思われま

懸命に生きた人々 — 秀吉の周辺 —

百年以上続いた戦国時代、教科書や年表に登場する少数の有名人に限らず、私たち一人一人のご先祖さまも含めて、みなが懸命に生き抜こうとしました。

今回、名古屋市中村区出身の豊臣秀吉の一生を中心に、彼とあゆんだ周辺の人物や、彼の前を通り過ぎていった実にさまざまな人たちが、それぞれ一人の人間として厳しい時代をどう生き、また死んでいったのか。本講演ではそれらの生きざまについてやさしく紹介します。

講師
加藤 和俊(かとう かずとし)氏
名古屋市秀吉清正記念館 学芸員

<プロフィール>
同志社大学大学院博士後期課程(文化史学専攻)中退。
名古屋市博物館・秀吉清正記念館・蓬左文庫の学芸員を経て再び秀吉清正記念館で現職。人物の記念館の学芸員として戦国時代の生々しさを多角的に探求、発信に努めている。

◇日 時 令和8年3月19日(木)

個人的に印象に残った講演内容

大河ドラマ「豊臣兄弟」の期待に応え、冒頭にウラ話を語っていただきました。

- ・大河ドラマ放映前の取材にNHKが秀吉清正記念館に訪れインタビューを受けた。
- ・ドラマはフィクションをベースに、面白く脚本されている。
- ・秀長の肖像画は、江戸時代に神格化されて描かれた姿で、本人とはかけ離れている。
- ・秀吉の肖像画は60歳を超えてからであり、似ているはずである。
- ・秀長は大河ドラマ以前には見向きもされていなかった。
- ・大河ドラマは秀長から見た、秀吉を脚本化されている。

講演本題の主な内容

- ・中村区で生まれた、秀吉、秀長、清正の話を語って頂きました。
- ・秀吉は1537年生まれで、1554年までは今川領浜松の松下家臣であった。今川滅亡後の1554年(27才)に織田家の小者として仕えた。歴史に名前が出てきたのは美濃攻めでの30歳頃である。
- ・秀吉は、太閤記によれば、矢作橋で蜂須賀小六に認められた。後に秀吉の家臣となった。
- ・秀長は、優秀なイメージで必死に働いていた。秀吉のライバルではなく補佐役であった。

- ・信長死後の秀吉は情緒的で、嘘をつけなく本音での手紙を書きまくった。
- ・清正は 1562 年生まれで、1588 年に肥後領主となった。名古屋ではなく、熊本で評価大。

講演者は、熱が入った話で時間切れまで語っていただき、質問時間は無くなりました。司会者から、質問は「名古屋市秀吉清正記念館」を訪ねて、加藤 学芸員を捕まえて聞いてくださいとのことでした。

又、講演者の加藤さんは、大病で入院されていて、まだ完治していない状態で講演者として登壇いただきました。感謝の一言と共に、寛解されることをお祈り申し上げます。



左は公演中の加藤和俊様

下は、講演後の廣田副学長の御礼挨拶と講演者のやり取りの光景

